083　風邪　030923

◎久しぶりに風邪を引いた、まさに風邪という邪鬼を吸い込んだ感じだった。「なんだかいがらっぽい　喉が痛いようだ　そう言えば腰も痛い」「葛根湯だ　こんな時のための葛根湯　葛根湯の出番だ」5 年以上も風邪とは無縁だった、「ジジイになると　風邪も引かないものか」ぐらいに思っていた。コロナのこの 3 年、風邪を引けば半分コロナと間違われケタイな制度で、お上の言うままに拉致されかねない。皆さんの話によると、どこかに収容され不快な何日間を監禁されるらしい。辛い病の上に、収容監禁は嫌だ、コロナの期間中はおいそれと風邪もひけないぞ、と思っていたので、ちょっとでも兆しがあると早々と葛根湯を飲んでいた。10 年 20 年前に衣川さんが、「葛根湯はいいよ　風邪の引き始め　初期の段階で飲むと　簡単に治ってしまうよ」と薬をもらったがそのままになっていた。せっかくの薬を飲まずに 1.2 度風邪をひいていたかもねえ。5 年ぐらい前から葛根湯賛歌の息吹を受け、「ちょっとおかしい」と思う都度 2.3 袋、もう一袋と飲んでいた。そんなお陰で風邪ひきを知らなかった。

◎河原行脚は四日間中止にした。最後の日、河原から帰って汗で濡れた服を脱ぎながら、「オレの身体　熱いぞ」と気づき体温計を探した。38 度ぐらいあった、「あれれ　これはやばい　なんだこれは」とあわて買い置きの風邪薬を飲んだ。その前日には葛根湯も 3 袋ぐらい飲んでいたが、「ついに来たかもね」である。翌日とその翌日は身体が重くゴロゴロ寝ていた、とはいえ日中は 35 度を超える猛暑日が続く。2 階のアトリエで寝ようものなら、うだるような暑さの中で身体がうだっているという状態、これはたまらんと思いながらも身動きができずそのままゴロゴロしていた。二日目か三日目に熱を計ると、平熱に近かったが、喉が焼けるように痛い。この喉の痛みは初めての経験だった。いつもは痛いとはいえ水も飲めたが、今回のものは水も飲めない。ちょっとゴクリとする度にひやりとするほどの痛みと違和感が響いた。この痛みは二日ほど続いたが、治りはじめ、水が飲める、コップを口に当て、コクリコクリとひと口づつ水を喉に流し込む快感がこんなに心地いいものかとあらためて喜んだ。
近所の医院に電話で時間を予約していった。なんと完全防護の恰好の先生。「熱が無いなら　コロナ検査をしても　陽性にならない　コロナっぽいけどねエ　普通の風邪薬を出しとくので　ここで清算　720 円」3 日分の薬をもらって帰った。「コロナなら　どんどんきつくなるよ　風邪どころじゃないよ　きついよ」と驚かされて帰った。腹は減り食欲はあるが、喉はやたら痛いの、なんだかぼ～っと覇気がない。

◎3 日分の風邪薬がなくなるころに、「あれれ　治ってきたのかな」と嬉しい兆しがあったが、「無理をしてぶり返しても」と慎重に、まだまだだらだらひっくり返っていた。ひっくり返ってとはいえ、かるたの絵を仕上げなければとちょっとづつ下図を描いていった。下図はまずスケッチ風に大胆に鉛筆を走らせ、「おお　これがいい　こんな風にデフォルメしても　面白い」なんてスケッチを転写台の上に置き、別の紙で線をなぞっていく、また新しい紙に線をなぞっていく、そんことを 3.4 回繰り返し下図ができあがる。転写台なんて長らく使わずに足元に鎮座していたが、おいそれとそれを引き出し今回の下図のお世話になった。転写台とは？ライトボックスとでも申しましょうか、箱の中に蛍光灯が入り、そのガラスの上にスケッチを置き、またその上の白い紙を置き下の絵をなぞっていく装置である。オレは今使っているのは、写真用のライトボックス、ポジのフイルムを乗せ拡大鏡で写真を見るもの、小さいフイルム写真がきれいに見えるんだよ。

◎オレの場合コロナの検査をしていないので、コロナなのか普通の風邪なのかわからないが、徐々に治ってきたが今もなんだか身体がだるい。コロナの後遺症として、味覚障害、倦怠感・・などがあるらしい。ジジイのオレはもう河原に出だして 3 日目、以前と同じコースを端折ることなく走っているが、しんどい感は続くねえ、山に登りたい、街に出たい、一杯飲みたい、そういう気概がまだまだ希薄である。

084　古事記　060923
三浦祐之著＜口語訳：古事記＞
◎オキナガタラシヒメ側と、オシクマ側は、日嗣の争いでオキナガタラシヒメ側が勝った。オシクマは歌い終わり、オシクマとイサヒノツクネは海に飛び込んで死んでしまった。

いざあざ　　さあスクネよ
ふるくまが　いたておはずは　　フルクマの　痛手など負う前に
にほどろの　あふみの海に　　カイツブリのごと　淡海の海に
かづきせなわ　　潜ってしまおうよ

◎日嗣の争いに勝ったタケノウチノスクネは、その御子を連れ、戦の穢れを禊で流そうとしての、淡海から若狭の国へと経めぐっておった。高志の国の角鹿（つぬが）に仮の宮を作り、御子を籠らせた。すると寝ている御子の枕元にイザサワケの大神が現れ、「わが名を御子の御名に替えよう」と仰せられた。
さて禊も果てて御子の母オキナガタラシヒメは都へ帰り上がると、祝いの待ち酒（旅に出た人などが無事に帰ることを祈って作る酒）を醸（かみ）作り、御子に差し上げたのじゃ、そして歌った。

このみきは　わがみきならず　　この神酒は　我がつくる作る酒ではないぞ
くしの神　とこよにいます　　奇（くす）しき神とて　常世にいます
いは立たす　すくなみ神の　　岩としてお立ちの　スクナビコが
かむほき　ほきくるほし　　言祝ぎ（ことほぎ）踊り　喜び狂い遊び
とよほき　ほきもとほし　　栄え言祝ぎ（ことほぎ）　祈り舞めぐりて
まつりこしみきぞ　　贈り来た神酒なるぞ
あさずをせ　ささ　　残さず飲まれよ　さあさ

◎幼い御子に変わってタケウチノスクネがお返しの歌をうたった。

このみきを　かみけむひとを　　このうま酒を　醸んだ（かんだ）ひとは
そのつつみ　うすに立てて　　この鼓を　臼として立て置き
歌ひつつ　かみけれかも　　歌いつつ　かんだからであろうか
舞ひつつ　かみけれかも　　舞いつつ　かんだからであろうか
このみきの　みきの　　このうま酒の　うま酒の
あやに　うただのし　ささ　　なんともはや　楽しいことよ　さあさ

◎この二つの歌は、今も酒造りに歌われておっての、酒楽（さかくら）の歌と呼ばれておる。

◎神の言葉を疑い、神の怒りを受けて死んだタラカシナカツヒコの大君じゃが、その御年は五十あまり二歳（いそとせあまりふたとせ）御陵は河内の恵賀の長江にあるのじゃ。大后の御年は百歳（ももとせ）じゃ。

◎神の名を賜うたホムダワケは軽島の明の宮に座しての、天の下を治めたもうた。この大君の御子たちは多くての、あわせて二十あまり七柱（はたちあまりななはしら）もあった。御子たちが多いと日嗣の争いが起こるものじゃが、この大君の御子たちの跡継ぎ争いも、激しいものじゃった。
◎この話はホムダワケ・オホサザキに移っていく。

085　今昔物語集　090923

尾張守〇〇五節所語第四＜おはりのかみ〇〇ごせちどころのこと＞

◎宿願叶ってやっと国守に任ぜられた老尾張守は、国政に励んで尾張の国を復興し、五節設営の役を割り当てられたが、何分とも宮中の事情に疎く、子女・一門の振る舞いもすべて田舎びていたので、若殿上人の笑いものとなった。その上、ことを好む若殿上人たちのこととて、いたずら心から尾張守の五節所襲撃の計画を立て、予告脅迫したうえで、五節の当日、一同異様な風体をして「ビンタタラ」の歌をうたいはやして押しかけ、尾張守の心胆を寒からしめ、一家をなぶりものにした話。

◎オレも宮中の事情に疎い、どこがどう面白いのか、首をひねりひねり、いろいろ調べ読み進んだ。

◎五節（ごせち）：奈良時代以降、大嘗会（だいじょうえ：おおにえのまつり：天皇即位後、新穀を神に供える儀式）および一月の新嘗会に行われた五節の舞を中心とする儀式。

◎五節の舞：十二単を纏った五人の舞姫の華麗な踊り。天皇に見初められるかもという、お姫様の一大イベント。

◎一生懸命仕事をしてく尾張の国を富ませた老国守なれど、「田舎もん　成り上がりもん」と貴族のバカ息子連にからかわれる話。

◎殿上人：9 世紀以降、朝廷で天皇の生活の場である清涼殿の殿上の間に昇ることを許された人：三位以上。

◎髪（びん）タタラ：「びんたたらを　あゆがせばこそ　あいぎょうついたれ　やれことうとう」丑の日に常寧殿の廊において、五節所の前で、殿上人らが、「びんたたら」の曲を歌いつつ乱舞するしきたりがあった。

◎人をからかう　バカにする、なじる、いじめる、人の性なのかこれはあるねえ、オレも昔はギラギラした人生、こういう言動もいくつか思い出される。そのテン、今は無くなった、まったくというぐらいに無くなった、清らかですぞ。

先日、「田舎もんと言われバカにされた　悔しかった・・」という人の話を聞いた。今でこそ緑いっぱい、自然いっぱいの田舎、と羨ましく思うぐらいだが、オレも、「田舎もんめ」なんてセリフを何度か吐いた覚えがある。オレの母親はその母の時代からの大阪モンだったが、父親は山口県育ち、家庭内でも、「田舎もんめ」的な発言を何度か聞かされた。とくに家庭内の場合は、田舎もんだからという以外に、育った環境、経済力、資質なんどをアゲツライ、口汚くののしる女どもの言葉も何度も口にした。

今昔物語集のこの話、貴族のバカ息子どもが、出世したが宮中に疎い一族の長、その長老をなぶるのかからかうのか、「腹を抱えて　笑ってしまう　話」とは聞き捨てならない話と怒る話なのか、同じように笑ってしまって今昔の世界にはまるのがいいのか、ま、仕様もない話はいいか。

◎「彼ノ五節所ニ行キテ　得意立チ可告（つぐ）キ様は、

◎一人の殿上人が、「うまい方法があるぞ」という。

「どうしようというのだ」ときくと、

「あの五節所に行き、いかにも好意あるような顔でこう言ってやるのだ」

「この五節所を　殿上人がひどく笑っていますぞ。お気を付けなさい。この五節所を笑いものにしようと、殿上人たちがこんなことを企んでいます。それは、ありとある殿上人がこの五節所をおどそうと、みなが紐を解いて直衣の上衣の肩を脱ぎ、この五節所の前に立ち並んで歌を作って歌おうということです。その歌とは。

「ビンタタラ・・ビンタタラの髪は揺り動かせばこそ、歩めばこそ、なんとかわいいこと」という歌です。

この、ビンタタラ、というのは、尾張守さんの毛が薄くて、ビンが抜け落ちているのに、こんなビンタタラで五節所の若い女の中に交じっておられるのを歌っているのです。

「あゆかせばこそ　愛敬つけたれ」

守が後ろ向きで歩かれる様子が「あて」やかなのを歌っているのです。

◎どうも世辞に疎いと、なかなか理解しにくい人々の心の動き・・かな。

086　古事記　120923
三浦祐之著＜口語訳：古事記＞
◎さあ、もう一度初めからと思っている。その前に，先生の能書きをちょっと紹介。
◎まず先生、古事記は全部漢字で書かれているが、本当は伝承文学、古代の語りの文学だ。
◎古事記の文体は、純粋な漢文体ではなく、和風化した文脈、和語（音仮名表記）で描写される。
◎歌謡が 110 首あまり出てくる。日本書紀には見られない、叙事的な長編歌謡が入っている。古事記が、韻律性の強い叙事歌謡によって物語を進行させようとしている。
ここに書かれている歌は難しい。絵「これが　日本語か」という単語・表現が多々ある。2000 年前の古代人のしゃべり口調が伝わってくる。ほんとうはまだまだ伝わっていないが・・。
◎古事記には同じような伝承やよく似た登場人物が出てくる。スサノオ・ヤマトタケル・オホハツセワカタケルの三人だ。スサノオとヤマトタケルは溢れる力を自ら制御できず突っ走ってしまう。酒を飲ませて相手を殺したり、相手を倒して火攻めにする、と語られる内容も似ている。オホハツセワカタケルも己を制御できない凶暴性をもち、力で相手をねじ伏せたり、相手をだまし討ちにする。
スサノオは神話的な英雄性があり、共同体に秩序をもたらす。
ヤマトタケルは天皇の命令を受けて遠征し、悲劇的な最期を迎える。
オホハツセワカタケルは、天皇となって国家を支配する。
◎兄妹婚の話が続く。タブーとされる同母兄妹の恋愛結婚が語られる。同母兄妹の相姦関係。
イザナキとイザナミ。最初にヒルコが誕生したというタブー性が描かれている。
サホビコとサホビメ。結末は二人の死となり、天皇とサホビメの間の御子ホムチワケは母の罪を背負って、もの言わぬ子として生まれてきた。
キナシノカルとカルノオホイラツメ（ソトホシ）。キナシノカルが国家と罪びととして流刑になり、追ってきたソトホシと共に死んでいく悲恋物語として描かれる。

◎稗田阿礼：「古事記は稗田阿礼の口述を太安万侶が編纂した」と教科書で習ってきた、が、どうも違うようである。天武に仕えていた 28 歳の阿礼は、「その人となりは聡明で、目に見たものは即座に言葉に置き換えることができ、耳に触れた言葉は心の中にしっかり覚え込んで忘れることが無かった」稗田阿礼という人物を介することによって、歴史は音声を伴って伝えられることとなった。
◎日本書記も古事記も天武天皇の勅語を受けて企てられたものでありながら、日本書記の歴史書の結実構想とは大きく隔たっている。日本書記が律令国家の根拠となる理想の歴史を記述しようと腐心しているのに対し、古事記はそれに背を向けるように進んで行く。古事記には理想の古代国家からほど遠い神や人の行動が描かれている。元はひとつのところから出ているのに、古事記と日本書紀には本質的な異差があるのはなぜか・・。

◎同じ天皇からの命令で書かれた、日本書記と古事記だったが。
古事記は天武天皇の勅語を受けて企てられたものでありながら、日本書記から見える歴史書に比べ構想が大きく異なる。日本書記は、律令国家の根拠となる理想の歴史を記述しようとして腐心している。
古事記はそこから背を向けるような印象を与える。アマテラスとオシホミミの血のつながらない関係、ヤマトタケルの反天皇的なイメージ、繰り返される内部抗争・・。いずれも古事記の伝承には理想の古代国家からほど遠い神や人の行動が描かれている。
古事記が奏上された 8 年後に日本書記が奏上されることとなった。

◎先生方の論争はいまだに多々あるらしいが、「難しい話は　わからない」と捨て置いて、神話として、叙事詩として、なかなか面白くやめられない本でありますぞ。

087　ぼやき 150923

◎もう 9 月の中旬、季節は秋、9 月になってから、夜になると虫の声が聞こえる、チリチリ聞こえる。「もう秋だぜ」とぼやくが、昨夜も真っ暗の中、ジワリ目覚め、扇風機を 1 時間タイマーでかけてまた眠った。この暑さ、異常な暑さ、「どうなってる」と声を荒げたくなるが、どうも我々が便利を求め過ぎたつけが回ってきているのかもという話である。

◎11 月に展覧会がある、「もうすぐだ　イライラ」なんて言いながらも先日来の“かるた”がいよいよ佳境に入って、もう 5.6 枚で終わる、一日がんばればなんとか終わるというところまで漕ぎつけた。「かるたの絵　50 枚　大変かな　時間がない」なんてことを聞きながら引き受けた。公募の句がなかなか集まらず、それを“いろは”に設定していくと歯抜けが出て、“はるみ・たに様さま”が四苦八苦していた。句にまで口を出すと忙しくなり過ぎると“口チャック”をしていた、なのでここでもこれ以上言うまい。最終の句が決まったのが一週間前だから絵の方はなかなかに順調に来ているわけであります。

◎かるたの絵はオレが普段描いているよう自由発想で抽象的に処理はできない。ソクラテスなんて出てきた。ネットでソクラテスの画像を探し出し、そこにオレが描いた絵と合成して CG 画像を創る、これは慣れた作業なので比較的簡単にしかもいいものができる。人物と建造物も合成できる。古い建てもので写真しかないものと絵とを合成できる。高校生たちが歩いている絵、そこに古い校舎または新しい校舎、それぞれを合成して今昔も表わせられる、これも場合によっては面白い。コンピューターとは CG とは、それなりになかなか便利なものでありンス。ま、絵で、説明する、解説する、これは何時もオレが言っている言葉、「絵は　説明してはいけない」「絵は　化粧してはいけない」というセオリーとは真逆の作業だが楽しんでいる。

◎オレの展覧会は 11 月 20 日から一週間、「こらあ　慌てんとあかんぞ」と焦って、かるたの絵を横に置いて一日かけて案内状の版下を作った。コンビニで焼くと、「え　色が汚い」と慌ててしまった。毎度のことだが、絵があり、パソコン画像があり、プリントアウトした紙があり、最終印刷物があるとして、オレの絵が案内状の絵と同じになってないといけない、色が違うなんてとんでもない。簡単に言うがこれが難しい、なかなかこれがピタリと上手くいかない。コンビニのコピーを見ながら悩んでしまった。印刷屋に色校正を追加して、明後日にもその物がやってくる。色校を見て再発注すればいいのだと今は楽観。いずれにしても 1000 枚の案内状が 9 月じゅうに手元に来る予定。11 月の展覧会は春の文学館と同じようなスタイル、奥の三面の壁に 20 号の縦の大きさでずらり囲ってみようと思っている。ま、こう説明してもなかなかに通じないので、見てのお楽しみということにしておきましょう。

◎阪神タイガースが優勝しそうだって、これを聞いてびっくり、というより、「こんなことを知らんかったんか」とおかんむりのほうが先に来そう。20.30 年前にも優勝したことがあったが、その時はあの汚い道頓堀川に飛び込んだ泥酔の若者が何人か死んでいた。今回も暴動が起きるのではといろいろ警戒態勢を整えているとかニュース氏が伝えている。明日か明後日らしいが、さてさてどうなるか、「そんなこと言って　また　肩透かしと　ちゃうのかな」なんていえば袋叩きに会いかねない、というめでたい話である。

◎体調はいい。今年も夏まではシンドイ疲れると言っていたが、9 月に入って元気が出てきた。いつもの河原も少し距離を延ばして、8 キロぐらいを走っている。走っていると言ってはおこがましいが、歩いているではなんだか悔しいので、やはり走っているでおさめてください。かるた作業で山は行かれてない、もう何日かで一段落すればひとりで登りに行きたい。比良がいいね。大嶺も行きたいが遠いので比良を選んでしまうが、大嶺の魅力は標高が高いことだ。登山口の標高も高いので労力は同じだ、高い山の魅力がある。

088　北小松　170923

◎9 時北小松駅から歩き始めた。なんだかまだまだ暑い。ここはほぼ一か月ぶり、前回も歩きながら背に日照りを受けて歩いていたが、9 月も半ばを過ぎた今もそう変わらない暑さ、じりじりである。先日来の“かるた”作業が一段落つき、何もする気が失せ、ぼ～っとしながら天気予報を見ると、「明日がいいじゃない」と山行を決めた。一か月以上“かるた”漬けの日々、「ああでもないこうでもない」と夢にまで絵の構想が何度か出てくる始末、「ま　この歳になって　エンヤコラの日々は　楽しかった」最近スケッチ画をパソコンに入れ色を入れる絵：CG に凝っているが、今回のかるたもそれを多用した。

◎10:20 涼峠。車窓からは前回同様比良山系は雲がかかっていた。青空で太陽も出ているがキラリ快晴ではない、ただ、暑い、前回と変わらない暑さは体力を消耗する。最近河原を走りながら、「ちょっと体力が戻ってきたね」なんて喜んでいたが、今日もまた登りでばてている、まだまだ続くこの登り、一本目でこんなことを言ってなんとすると叱咤激励するも、身体は正直に悲鳴を上げている。

◎白い綿のようなキノコが落ちていた。スマホで調べるも出てこない、帰ってパソコンで調べるもわからない。綿の花のようなところに柄が付いている。キノコのカビとも出ているが、ま、ケタイなもの発見でいいか。

◎ふ～ふ～言ってヤケ山にやってきた。「このペースだと　釈迦は 2 時になるかな　前回同様　時間がかかる」春は 4 時間で登っていた、ばてることなくどんどん登れた、いやだねえ衰えは・・。

◎ヤケオ山にやってきた、もう一本足らずで釈迦だ、がんばるべ。空は青々、琵琶湖がまる見え、麓の街がくっきり見える、水上バイクの轟音が湖面を走っている、安曇川の街も見える、伊吹、鈴鹿の峰々がかすんでいる。ススキの穂先が固く空に刺さっている。釈迦のあたりが霧で見えない。前回は同じような時間に小雨が降ってきてカッパを出して着た。今日はまわりが明るいので降りませんようにとエンヤコラ登って行った。

◎腹が減らないということは体調が良くないんだね、登りの途中で、カップヌードルを食ったこともあって、釈迦をちょっと下ったところで弁当を広げた。いつもの玄米ごはんに梅干しと胡麻、おかずは卵とじの野菜炒め、なんてことを言いながら、美味いとぺろり平らげた。カップヌードル用に持ってきた湯をソロりそろりと口に入れた、熱い白湯は心地いい、しっかり腹に入っていく。

◎登りの時にはすでに着ているものが汗でぐっしょりしていた、長袖のシャツ一枚、首にタオル、ズボンのベルトも、ザックのベルトも濡れている。水は 2L 持ってきたがゴクリゴクリと飲み続けている、麓の水場に着くころには水は一滴も残っていないだろう。

◎てっぺん付近で濃い黄色にまだら斑点のある蝶をたくさん見た、美しさという点では、この黄色は、オレは好きではないが、蝶の舞う山もいいじゃないかと好き嫌いをいうオレに、アカンを一点。

◎釈迦岳というピークはあまり楽しくない。木が生えそろい景色は見えない、そのテンちょっと下った北小松よりは琵琶湖がまる見えの崖のそば、ここはいい感じのところだ。北比良方面に行くと山の様子が変わり湿原があり武奈ヶ岳があり好きな比良が展開する。ここ数回常連の道、昔のロープウエイの駅のある道、樹々が鬱蒼と薄暗いが、大きな石、ひねくれた樹々、これまたいい景色が続く。

◎もう 1 時間ぐらいで登山口というあたり、スルリンとひっくり返った。雨がいつ降ったのか知らないけれどこのあたりの地面は湿っている。気をつけなくてはと思いながらも、ここは大丈夫だろうと思った石がスルリ滑った。右足が滑って右の手の平を床に着いた。手のひらの場所が草むらだったのでラッキーだけれど、石のスルリ感は、泥よりも抵抗が少ないようでまさにスルリであった。まだ 3 時だけれどなんだか薄暗い、隙間から見える空は青いけれど夕方の雰囲気、だんだん日が短くなってきているのかな。

◎ロープウエイの駅におりてきた。多分早い目のバスに乗れるのではと思いつつ、濡れたシャツを脱ぎタオルで体を拭いた。ザックから乾いたシャツを出し、ちょろり流れる湧水を汲んだ。一杯もう一杯、美味いねえ、冷たいねえ、ズボンの替えは持っていないのでこのままで歩き始めた。比良駅までのバスは 400 円也。

◎歩きながら、電車の中でビールでも飲みたいとゴクリ想像していたが、電車の冷房がきつい、ザックから雨具の上着を出して着た。1 時間以上こういう冷房の中、若いころから冷房には弱いオレだ。

089　今昔物語 230923

◎キノコの食中毒の話がいくつかある。わが国には 5000 種足らずのキノコがあり、食っていいものが 100 種、食えないものが 200 種、それ以外は毒性の有る無しもわからないということらしい。毒には三つの障害があるらしい。消化器系は腹痛・嘔吐・下痢＜ツキヨタケ・クサウラベニタケ＞。神経系は幻覚・めまい・頭痛＜テングタケ・シビレタケ＞。原型質毒性系は臓器不全にいたる＜カエンタケ・ニセクロハツ＞。

左大臣御読経所僧酔茸死語＜さだいじんのみどきょうじょのそうたけにえひてしぬること＞第十七
金峰山別当食毒茸不酔語＜みたけのべつたうどくたけをくひてえはざること＞第十八
比叡山横川僧酔茸誦経語＜ひえのやまのよかはのそうたけにえひてきょうをじゅんすること＞第十九

◎第十七：寺の小僧がヒラタケをたくさん採ってきた。僧は、「それはいいものを採ってきた　早速汁物に」とその弟子と小僧と三人で膝を突き合わせ腹一杯食った。三人ともにわかにのけぞって苦しみ悶え、反吐を吐き、七点八倒したあげく、僧と小僧が亡くなり、弟子の僧は死ぬほど苦しんだ末命を取り留めた。
かの僧は、藤原道長のため個人的に経を読む僧だった。ゆえに、道長から多大な葬儀料は下された。
その事件に触発され、同じ読経仲間の東大寺の僧が、同じヒラタケを取り寄せ飽食した。そのことを道長に問われると、「いずれ死ねば野ざらしになる身なので、葬儀料欲しさに・・」と答えた。狂僧と笑われた。ユーモラスな狂言自殺譚。

◎第十八：金峰山（みたけ）：これは吉野から大峰山に到る山々の総称らしい。金嶺山寺＜きんぷせんじ：正式には金嶺山寺、みねの漢字が違う、今昔物語では峰が使われている＞オレ、この寺は何度も見た。大嶺山系の中にあるひとつ、山上ヶ岳のてっぺんにある。調べると 1000 年ぐらい前に建てられ何度か消失しているが、今のものでも 1600 年頃に再建された物らしい。よくまああんな山奥にあんなでっかいお寺を建てたものだ。登山をするオレがたいした荷もなくふ～ふ～言って登るそのてっぺんが山上ヶ岳だ。材木は現地調達できても建築資材を人力で上にあげるのは大変な労力と想像する。
金峰山に一人の老僧がいた。老僧の上に長老の別当がいた。「あの別当は八十を過ぎたにもかかわらずぴんぴんしている」「わしもすでに七十を過ぎた」「もしかしたらわしは別当になれず　先に死んでしまうかもしれない」「別当を打ち殺させたいが、事がばれまずいことになる」「よし　毒を食わせて殺してやろう」「ワタリという毒茸がある　これをヒラタケと言って食わそう」老僧はワタリを採ってきて旨そうな煎り物を作り、ごはんと汁物を用意して別当を招いた。腹いっぱい食べた別当は、「こんな旨い　ワタリは　喰ったことが無い」と笑っているのを見て、老僧は恥ずかしく奥に引っ込んだ。毒茸でもあたらない人がいるもんだ、という話。

◎第十九：比叡山横川（よかわ）に住む僧がいた。僧は木を伐っていたが茸を見つけ持ち帰った。「これはヒラタケではないぞ」という者もいたが、これを腹いっぱい食べた。しばらくして、身をのけぞらし苦しみ反吐をはき散らした。苦しさに耐えられず、唯一の財産の衣を差し出し、病悩本復の祈祷を導師に頼んだ。
解説では、動詞の臨機応変の教化の珍妙さ、導師の説教僧として、話しの上手と奇態百出ぶりと出ているがその妙がオレにはわからない。
人間の迷いのもととなる六因：目・耳・鼻・舌・身・意（心）六根清浄が理想とされた。五臓：心・肝・肺・腎・脾の内臓器官、現代医学では膵臓が抜けている。六腑は胃・小腸・大腸・胆嚢・膀胱・三焦（身体を三つの領域に分けてとらえる）
導師：山に棲んでいるが、六根五臓を正常に保てる境地に達していない。舌を用いるはずのところを、耳と取り違えた（耳と茸をかけている）。みしらぬ岳（茸とかけている）にひとりで迷った。これを聞いた僧たちは腹の皮が切れるほどに笑いこけた。かの僧は死ぬほど苦しんだ末やっと助かった。

090　パソコン 280923

◎いつも言っているが、パソコンは便利そのもの、今のオレにはパソコンがなければ手足を半分取られたようなものかな、とは本当に大袈裟じゃなく言えるかもである。

◎「何に使っているのかね」まず通信でしょう、IT これは便利だ、これはさほど大事でないものがほとんどだが、ちょっとした井戸端会議風の会話から、あれやこれやらの業務連絡、色々来るねえ。スマホをゲットした今、“LINE”という連絡手段があってこれがいたく便利である。文章のやり取り、画像も遅れ、電話機能も付いている、これがすべて無料だというからありがたく利用させてもらっている。

◎このブログがそうだが、文章を書き、自身のブログコーナーにアップする、「なんだ　日記　日誌　じゃねえか」「そう　単なる　日記　なんだが・・」アップする作業をワン行程することによって、三日坊主で終わらないのである。「ほほほ　10 年以上　続けているよ」

◎画像の処理：50 歳代の時に、「パソコンを買おうか　陶器の窯を買おうか」と迷ったが、軽自動車が買えるような金をはたいてパソコンを買った。とある方に紹介され、「これと　これと　・・」と言われ日本橋に行ってアップルコンピューターのパソコンを買った、マックのことである。右も左もわからず一年間ほどその方に習ってヨチヨチ歩きができるようになった。その方はデザイナーなので、「画像の処理を勉強したら・・」ということだったと思うが、「コンピューターグラフック　のプロにはなれないな」「絵は手描きがいい　絶対に」てなことでヨチヨチ歩いて来たけれど、これらのグラフイックの知識、コンピューターで画像を加工処理する知識がおおいに今も役に立っている。

◎先日カメラをゴツンと石の床に落としてしまった。以後、ボディとレンズが外れづ四苦八苦、カメラ屋のおっさんが力まかせに外してくれたが、カメラもレンズも調子が悪い。思い切って買おうと考えた。現行のレンズを使うなら今のカメラの後継機がいい。カメラもレンズも買い替えるなら、これからジジイになっていくオレにとって、軽く小型のカメラがいいのでは、思案の末に 11 万円奮発して後継機を買った。

◎話しの本筋に入る前に、最近のパソコンでの悪戦苦闘をご披露。例のかるたの資料のやり取りに、「G ドライブを使いましょう」と言われた。「GOOGLE ドライブ　これはいたって苦手、G フォトが最近やっとなんとか使えるようになってきたが、まだまだ難しい部分はわからない。「なにい　G ドライブ・・」ということで相手から入ってくる情報はなんとかキャッチできるが、共有ということがわからない、相手に伝わらない。一日二日経ってなんとかできるようになり、50 枚の重い絵を G ドライブに載せて皆さんに見せることができた。

◎その次に　「スマホとパソコンを連動せよ」との指令、なんとか右へ左へとすることができたが、パソコンが開かなくなった。「ピンを入れろ　パスワードを入れろ」「ピンも　パスワードも　パソコンの中に　メモしている　どうすりゃいいのだ」とてんやわんや。かるたの絵にしろアトリエの絵にしろ、絵を描く分には慣れたもの、何がどうなろうと仕事はできるが、パソコンが言うことときかないと、なんともはやお手上げである。

◎さあ新しいカメラ、「え　落としたレンズが　機能しない　あれれ　カメラもレンズもダメなのか」とまずアナログの第一打、イテテである。もう一つのレンズは快調なのでいくつか撮影した。快調な方は 40 ミリのマクロレンズ、これは絵の撮影に最適である。値段も安く新品で 2 万円ちょっとでゲットできた。機能しない超広角レンズは、故中西さんが、「絶対　買え　ええぞう　10 ミリばかりで写せ」と言ってくれた。これは新品は 10 万円を超すものを中古で 5 前円ちょっとでゲットした。

◎「さあ　RAW　現像を　するべ」とパソコンを起動させたが、かの PHOTOSHOP 氏が、「このデータは　できません」とおぬかしになる。「ええええ　なんで・・」またまた悪戦苦闘の二日間、オレの知り得た知識では、オレの持っている PHOTOSHOP が古すぎるのと、買い換えたカメラが、持っていたカメラの二代後継機で、ともに、Camera　RAW のプラグインがづれているとか。なんとかんとか、アドビー製の変換ソフトを探して試すと、以前のように作動するようになった。二工程増えるが、ま、やれやれである。

091　ポンポン山　300923

◎6：45に自転車で家を出た。いつもの安威川を渡って行く、橋の上、「お　シラサギ君　最近目立つね」20羽ぐらいの白いサギがあちこちに動いている。5.6羽の家族がいくつか水に浸かって魚を追いかけている。白い個体はよく目立つ、横に2羽いるカワウは、橋の上から黒い水に黒い個体、判別はできるが目立たない。鳥学者によると白は天敵にも見つけられやすいが、仲間同士がよく見つけられる連帯感を優先しているらしい。

◎1時間ぐらいで高槻の摂津峡下の口に着いた。そこに自転車を止め、上の公園のトイレに行き靴の紐を締めなおし、ザックからポシェットやら水やらを出し、歩く体制を整えた。空はまっさお、白い雲がはしっこに少しあるだけ、長袖のシャツ一枚、ちょっと暑いぐらいだが心地いい風も吹き、夏のギラギラの暑さはもうない。

◎摂津峡が終わって村の墓の横から登っていくのがオレのルート。原村の猫の額ほどの田んぼにおっさんが軽トラックを止め、鎌で稲刈りをしている、もう収穫の時期なのかと感動。この稲刈り、帰るときにもまだ続いていた、小さいコンバインで一列ごとに機械に吸い込まれていく、刈った稲藁はコンバインの後ろからくずとなって田んぼに撒かれていく。オレンチも米を買わねば、玄米は日本海側の峰山産のコシヒカリを30キロ1万円ちょっとで勝っている。ごはんに白米を少し混ぜて炊いて欲しいというリクエストで、白米の銘柄は気にせず普通に売っているのを買っている。「北海道の〇〇がいいのだが・・」という希望もある。

◎9：30高速道路横の登山口、そこでゼリーのカップを食べ水を飲んだ。「ここから参道の合流点まで　1時間ちょっと　ノンストップで行くべ」袋に入った手製のパンを少しずつかじりながら歩いた。今年の盆のころに風邪を引いた、多分あれはコロナだと思うが、強烈な喉の痛み、38度の熱、いつもの風邪とは違う進行状態、風邪薬を飲んでかるたの絵を描きながら半日寝るという日が3日ほど続いた。そのあと徐々に治っていったが、「寒気が取れない　眠い　疲労感」「これはひょっとしたら後遺症」なんて思っていた。9月に比良に登った時に、いつもなら4時間で登れる山が、5時間もかかった、しかもしんどい。8月のまだコロナに罹っていない時も5時間かかったが、こと時は猛暑のせいと思っていた。9月もまだまだ暑かったが、「この体力の無さは後遺症かな」と思った。今日は、「まだ　コロナの後遺症が　残っていませんよう」と試運転にこの長い時間かかる近所の山を選んだ。結果的に、「もう大丈夫　後遺症は　残って　なさそう」と思っている。

◎参道との合流の手前で真っ黒けの蛇がのんびりしていたが、オレの近づくのを感じてスルリ逃げていった。1メートル弱の黒光りのりっぱなやつ、慌てカメラを出して写した。あの大きさなら青大将かな、それならまだ青年だね。調べると山で見かける黒い蛇は、シマヘビ（黒色化）・ヤマカカシ・マムシの3種だそうで、顔が細かったのでマムシではなさそう。あの真っ黒けはいいねえ。

◎参道との合流点まで一気に登れた、気持ちがいい、これで体力も元に戻ったかな。バナナ・リンゴを食べ、持参のコーラの栓を開け、ゴクリ、「あれれ　口からあふれる　急いで飲んじゃ　ゆっくり味わって　コロナの時の喉痛を思い出し　そろり　飲んだ　美味い」このコースのいい所は、お金が全くいらない、使わない、自転車と歩くだけ、食料さえ持っていれば朝から晩まで楽しめる、そう、年に2.3回は来るかな。ま、ジジイになったのだから、車で高槻の上ノ口まできてから登る方が楽かな。

◎12時頃にてっぺんに着いた。休日でもないのに元気なジジババが大きな声で話している。持参の弁当を食って写真を撮り、「スケッチは　ちょっと下で　するか」と早速下った。温度計は23度である。

◎このあたりの山は500.600メートルと標高は低くほとんど樹林帯が続く、樹々は緑の葉を天に向かって広げている、なので眺望は悪い、景色がまったく見えないが、そのぶん太陽が遮られ、直射日光が当たらず多少涼しい。まだまだ紅葉はない。

◎3時に神峰山寺の牛のいるところまでやって来た。本山寺の参道を下っている時にザックに入っていたパンを二つ食った、牛のところでチョコレートを食った、これで持参した食糧が終わった。ザックに非常食の小袋がまだ3個入っているが。下の口まで1時間、自転車が1時間、帰宅したのが5時だった。